

# 草庵仏教

第148号  
(発行日)  
2002年10月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
mail: kimyou2@siren.ocn.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座 (念仏堂)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会 (念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 同和問題について

W 「真宗大谷派では近年、同和問題に力を入れてますね」

D 「ええ、靖国問題と同和問題は、大谷派教団が担っている中心的な課題です」

W 「同和問題ですが、部落差別は今でも強固に残っていますね」

D 「そうなんです。差別がなくなるにはまだまだ時間がかかると思います。何しろ身分的な差別が制度上に撤廃されたのは戦後の日本国憲法制定からといってもいいと思います。特に江戸時代の約260年間は身分制度が政策的に強固に固定化していったから、その影響がまだまだありますね」

W 「いまでも先祖は士族の出だとか、庄屋の出だとかいいいますね。江戸幕府はなぜそれほど厳しく身分制を定めたのでしょうか」

D 「軍事独裁政権であった幕府が民衆を支配するためには、上下に身分を定め、階級的なタテ社会を作る方が民衆を支配しやすかったからです」

W 「江戸時代までは人びとの間で差別はあっても、身分的に固定してはいなかったんですね」

D 「そういわれています。たとえば戦国時代は秀吉のように百姓でも大名になれたし、富を蓄積

すれば商人となつてかなり自由に活動が出来ました」

W 「学生時代の同和教育の時間でなぜ被差別部落が出来たのかという発生の起源について、それは江戸幕府によって政治的に作られたものだ」と教えられたのを記憶しています」

D 「政治的に作られたものであることは間違いないことです。ただ、為政者といえども何もないところから勝手に作ることはできなかつたので、最近では当時一般の人から差別的に見られた人たちを、政治的に制度化して非人や穢多身分などとして固定したのだといわれています。ただ江戸時代まではなお社会の階層は流動的で、チャンスがあれば、差別される境遇を離れることが出来たのです」

\*

W 「日本の歴史の中で、差別的に賤視された人たちが歴史の最初期からいたのでしょうか」

D 「ええ五色の民といわれるような人たちが飛鳥・奈良時代にいました」

W 「なぜそういう人たちがいたのでしょうか」

D 「これはどの国でもあり得るのですが、国が武力で統一されてくる過程で征服された人たちは征服した人たちの下で隷属的

に扱われました。日本ではそういう人たちは奴卑といわれ租税の義務はない代わりに、奴隷的に扱われ、また人のいやがるような仕事に従事させられました」

W 「社会的に弱い立場の人が人のいやがる、だれもしたくない仕事に従事させられる場合が多いですね」

D 「それに古代国家の時代から当時の中国に倣って、人を貴・良・賤に分ける考えがあり、その影響がずっと続きました」

W 「貴・良・賤とは」

D 「貴とは支配者層で、貴族や上位の僧侶、後には武士などで、良・賤は被支配者層で、その中で良は農民で米を作る人たちです。農民が良民とされたのは、米の生産が人民を養う元になるからであり、それは同時に支配者の権力の基盤になったからです。国の力を米の稜高で示すのはその表れです。それ以外の職業は下位に置かれました。漁業に従事する人は農民よりもやや下ですね。商売人は食料もなにも生産しませんから下位に置かれました。江戸時代は士農工商だけでなくもっと細分化した身分上の差別がありました。山の狩師も運搬業の人たちも賤視されましたし、生産をしなくて遊興で食っていると見られた芸能関係者も賤視されて差別されましたし、江戸時代一番下位に置かれたのが穢多・非人と言われた人たちです」

W 「どういう仕事をしているかによっても、人は差別され賤視されてきたのですね」

D 「現代でも従事している仕事によって、人間の優劣をつけるという風がまだありますね」

\*

W 「そうすると江戸時代に入ると、それまで一般に差別的に見られていた人たちがいて、そういう人たちの一部が穢多身分というような最下層に置かれ、固定的な身分として、結婚や職業選択や住居の移動や時には着るものまでも自由が奪われるという厳しい差別を受けたのですね。江戸時代に入る前まではそういう人たちはどうだったのですか」

D 「先ほども言いましたが、社会の下層に置かれた人たちというのは、そういう人が歴史の初めからいたのでは当然なくて、戦の捕虜になった人たち、莊園から逃げ出した人、飢饉や洪水などで生活が窮乏した人たち、生活のためにやむなく賤視されるような仕事に従事した人たち、そういうさまざまな縁によって社会の底辺で生活を余儀なくされた多くの人たちがいました。そういう最下層にいた人たちは一般に(河原者)と呼ばれていました。けれども江戸時代の前までは、こうした社会的な位置はなお流動的であり、身分として固定してはいなかったのです」

W 「ということは、経済的な力を持つとか、才能に優れるとか

によって、社会的な階層を高めることが出来たり、差別視された場所を離れて住む事が出来たということでしょうか」

D 「そう思います。しかし江戸時代にはいと制度的政策的に身分が固定されて、穢多身分や非人身分にされたり、あるいは平民であつても一般の町民などよりも下位に置かれたりして、そこから抜け出ることが出来なくなりまして」

W 「社会のもつとも底辺で生活を余儀なくされ、周辺からも賤視されていた人たち（河原者）が江戸時代に入ると政策的に最低の身分に固定的に定められたのですね」

D 「そうなんです。早い話が、現在、失職などで生活に困窮した多くの人たちが河川敷などでテントを張って生活し、人の捨てたカンや電気製品などを集めて生活しています。税金も払うことはいらず、地代もいらず、水もありますから、ほかの所より住みやすいので河原や公園などに多く多く集まってきました。ところが周りの人たちはそういう人たちを蔑視しがちです」

W 「見下しがちですね」  
D 「あの人たちは最近まで普通の生活をしてきた市民なのです。ところがこれがもし仮に封建時代で、為政者が身分制によって人民を支配しようとする時、そういう人たちをどういう身分にするかを試みに考えてみますと、

彼らは低い身分に置かれやすいと思います」

W 「そうなってしまうでしょうね」

D 「一部の河原者が江戸時代には穢多とか非人という身分に固定されましたが、もちろん生まれつきそういう身分があつたわけではありません。現在、河原で生活をしている人が普通の市民であると同じように」

W 「当然ですね」

D 「ところが恐ろしいもので、政治的にあるいはさまざまな社会関係の中で作られた身分が、いつの間にか生まれつき人間に上下の差や浄・穢があるように思われるようになりました。裸の人間に身分や浄・穢などというものはもともと無いに決まっているのですが、社会的なさまざまな条件によって、社会的底辺に置かれた人たちが、いつの間にか生まれつき人間に上下や浄・穢の差があるが如くに見られてしまう、それは江戸時代が終わつてもなお人びとの意識に残つていったと思ひます」

W 「社会的な様々な状況によつて、社会の底辺に置かれた人たちは、周りから賤視されていく中で、人間そのものまで貴・賤でみられ浄・穢で見られて、不浄な人たちと見られるようになったのですね」

D 「そうなんです。社会的な縁ということでは一向一揆で最後まで抵抗した真宗門徒やキリシ

タンから転向した人たちが穢多身分に落とされたといういくつかの事例が報告されています」

W 「真宗教団を最後まで守り抜こうとして、戦つた人たちがそのような仕打ちを受けたのですね」

\*

D 「ええそうなんです。それからとても大事な問題があります」

W 「どんな問題ですか」

D 「差別問題を考える大きなカギに（言葉のもっている問題）があります」

W 「ふだん使っている言葉に関わる問題ですか」

D 「そうです。昔、こんな経験をしました。金沢に滞在した時のことです。地元のある人から、

（どこから来られたのですか）と尋ねられましたので、（大阪です）と答えましたら、（大阪ですか、儲かりませんか）と言われまして。それを聞いて、なにかいやな感じがしたのです」

W 「どうしてですか」

D 「大阪人イコール常に計算高くて金儲けのことしか考えない人たち、という目で見られていて感じがしたからです」

W 「大阪に住んでいる人間というだけで、常にお金儲けのことしか考えない人と思われている、そういう感じがしたのですね」

D 「そうなんです。大阪人という言葉が持っている偏った社会的通念が何となくあるのですね。それで（大阪の人）という言葉

を聞くだけで、相手が実際には

どんな人かを確かめもしないで、そのゆがんだ通念でもって決めつける。（ああこの人は大阪の人間だから、そろばん勘定でしかものを見ない人なんだ）というレッテルを貼つてしまう」

\*

W 「ところで社会通念というのは何ですか」

D 「社会の多くの人が共通に思っている内容のことです。通念の中には、実際とかけ離れた内容とか、ゆがんだ差別的な内容がたくさんあります」

W 「私たちは事実そのもので物事を判断するよりも、言葉を聞いて、その言葉の持っている意味ないしは観念で判断してしまふことが非常に多いですね。言葉に付随している観念や社会通念が正確な場合はいいのですが、

偏った観念である場合には差別になりやすいですね。たとえば身近な例では、フランス人と聞くとレベルの高い人、フィリッピン人と聞くとレベルの低い人と決めつけてしまい、無意識的に差別的に見てしまうことなど日常的にたくさんありますね。

実際はいろんなフランス人がいるし、いろんなフィリッピン人がいるにもかかわらず」

D 「言葉とそれに付随している社会的通念で、ものを見る、いわば言葉に付随している通念で判断する、そこに差別が起こりやすいのです。私の小さい頃、（チヨウセン人）というのは蔑称の

一つでした。相手の人が（在日）と言うだけで、その人をゆがんだ通念で判断し、実際はどういう人であるのかを知ろうともしないで、差別的に見ていましたね。今でもそういう差別視は無くなったとはいえませんが」

W 「人をどう見るかと言う場合、言葉に付随している観念や社会一般が持っているイメージいわば通念で判断する。その通念が非常に差別的で誤った観念である場合は、人権問題や社会問題を引き起こす差別につながるのですね」

D 「そうなんです」

W 「たとえば（あの人たちは部落民だ）とか、もつとひどい蔑称で呼ぶ場合がありますが、そういう言葉に大きな問題があるのですね」

D 「そうなんです。その場合、正確に言うと言葉に問題があると言うよりも、言葉にひつついて通念とかイメージを、そのまま（事実と思ひこんでいる）、そこに問題があるのです」

\*

W 「なぜですか」

D 「人間はしばしば自分の観念や社会通念をそのまま事実だと思ひこみます。それが仏教では凡夫の生活におけるもつとも大きな倒錯と教えています」

W 「人間は思っていることがそのまま事実だと思ひこんでいる場合が非常に多いのですね」  
D 「そうなんです。曾我量深師

に「タヌキにだまされたという人はいるが、だますタヌキはない」というおもしろい言葉があります」

W 「人をだますタヌキなどは実際にはいるはずもない。けれどもタヌキにだまされたと思ひ、だますタヌキが実際にいるように（思いこんでいる人はいる）のですね。思いこんでいる内容通りのものは実際には無いけれども、あるように思いこむ事は出来るし、思いこんでいる人は実際いるのですね。このことが部落差別とどう関係しているのですか」

D 「ええ。先の曾我量深師の表現を借りて結論的に言えば「部落民と思う人はいるが、部落民はいない」のです」

W 「部落民とよく言いますが、そういう人はいないのですか」

D 「ええ。そんな人はもともとどこにもいません。そういう言葉と観念があるだけです」

W 「じゃ同和地区に昔から住んでいる人たちはどうなんですか」

D 「私たちと全く同じ（ただの人）です。その人たちが（部落の者）と周りの人たちが呼んでいる、多くは差別視しているだけです。いわば（部落民などというものはもともと存在しないのに人為的観念的に存在させられている）のです。実体として部落民というのは今も昔もないのです。ただそのように周りの人たちから思われ続け、差別さ

れ続けてきたという観念の連鎖があるだけです」

W 「いわば共同幻想ということですね。親から子へ、子からまたその子へ、そういう悪しき観念が刷り込まれ続けてきたのですね。現在も。（あの人たちは違うんだ）というようない」

D 「そうですね。まったく幻想なのですが、その幻想が厳しい差別を生み出してきたのです。観念は行動となつて浅ましい差別行為を生み出します」

W 「これは非常に大事な点ですね」

D 「ええ、ここのところは何度も何度も、繰り返し自分たち一人一人がよく思索せねばならないところです。これは仏教の教えの重要な核心でもあります」

W 「でしたら今一度反復してください」

D 「周りから差別され続けて来た人たちを部落民とかもつといむべき蔑称で呼んだり思ったりしてはいますが、それは部落民というマイナスイメージや非常にゆがんだイメージとしての（社会通念で人を見ている）のであって、もともと部落民という社会通念に対応した人は（いない）のです。周りの人と違った種類の人がいるのではなくて、周りの人と同じ人がいるだけ。ただ同和地区に生まれ、ずっと前から住んでいたという縁だけで、周りの人たちから（部落民）という非常にゆがんだ通念をもつ

て見られてきたのです。あたかもそういう（特別な人たち）が実際にいるがごとくに見られてきたのです。要するに（部落民）にしろ又は非常に差別的な呼称で呼ばれてきたにしろ、それらは上からかぶせたレッテル（意味付け）だということですね。私たちはその人たちに貼り付けたレッテルをその人そのものだと思ひこんでいるのです。やさしいたとえで言うと、物を黒色の眼鏡で見ると、あたかも黒い物が外に実際に存在するように思ひ誤まるのと同じですね」

W 「たとえ（部落のもん）がいるのではなくて、（部落のもん）と思つてたり呼んだりしてきた人たちはいるのですね。そういう周りの人たちの観念が一人歩きしてきたのですね」

D 「そうですね。ただその観念は社会的差別行為となつて現実化しますから恐ろしいのです。さらに言うと、地区の外にいる人だけが、部落民が実体的にいるように思ひ続けてきただけでなく、地区の中の人たちも（自分たちは部落民だ）と（思ひ）れ続けてきた（面）もあります。どちらも幻想です」

\*

W 「ひどいものになると人種が違ふとか遺伝的に異なるとか、言われたりしますね」

D 「それは歴史的に見ても全くの誤解です。大体、日本人そのものが南方系、北方系、朝鮮半

島から来た騎馬民族系などの混合民族であつて、一種類の民族だけで成立したのではありません。また個人的にいうと私たち一人一人の先祖を十代さかのぼると先祖は1000人を越えます。さらにさかのぼると数え切れない数字になりますから、どんな人も過去の歴史において、過去におけるいろいろな階層の無数の人の血が流れてきています」

W 「ただ江戸時代は身分の違いによつて結婚が自由ではなかったのですね」

D 「ええ。江戸時代はね。江戸時代まではわりと自由でした。現代ではたとえ同和地区での結婚において、地区内の人が地区外の人と結婚する率は5割を越えています」

\*

W 「そういう差別されてきた人たちは比較的言葉づかいが粗野であつたり、態度が反抗的であつたりで、こわいという印象を周りの人にもたれることがありますが、どうしてなのですか」

D 「言葉使いがやや荒っぽいという印象ということですが、それは周りから差別され抑圧され続けてきた人たちは結束して助け合うという濃厚な共同体の中で長い間生活してきました。そういう共同体の中での親密な者同士は敬語を使う必要はありません。そういう慣習が影響しているのだと聞いています。私たちでも

家の中ではぎつくばらんな会話をするようなものです。それから、やや反抗的な態度が目立つというの、これは周囲の人たちから抑圧され差別され続けてきた中で、その抑圧をはねのけて生きていくためには、そういう態度を取らざるを得なかったのだと聞いています。周囲の人たちから厳しく排除され続けた来た人たちが周囲の人たちに親しく従順であることはできない相談です。ですからそういう態度は周囲の人たちの差別的抑圧的態度が原因だということですね。しかし、周りからの差別がなくなつていくに従つて、お互いの人間関係が良くなるし、良くなつてきていると思ひます」

W 「要するに周りの人たちの差別や抑圧が元なのですかね。経済的窮乏とか職業とか反権力の犠牲などのいろいろな縁で社会の底辺の置かれてきた人びとが、とくに江戸時代には身分制度で自由を奪われて、一定の場所につなぎ止められ、人間的にも生活動的にも厳しい差別を受けてきたのですね」

D 「そうですね。その後、明治時代から制度上の差別は撤廃していきましたが、人の心に潜む差別意識はなかなか消えないままで今日まで続いています」

W 「国民一人一人の課題ですね」

（了）

# 香樹院師の言葉

- 一、心が御手元へよらぬゆえ疑いがはれぬ。
- 一、如来の御勅命が我が身一人の為と聞こえぬゆえ疑いがはれぬ。
- 一、御授けの信心と云うことがわからぬゆえ疑いがはれぬ。
- 一、たのんで助かると思うから疑いがはれぬ。

①心が御手元へよらぬゆえ疑いがはれぬ。

お手元というのは言うまでもなく阿弥陀様の手元のこと。お手元へ心がよるといふのは、阿弥陀仏のご恩に心を寄せることである。「もし汝が浄土へ生まれることが出来ないようなら仏にならぬ」と誓われた法蔵菩薩が、「この誓いを成就してすでに阿弥陀仏になっておられるという事は、私が仏になる因はすでに成就してくださったということ。そこを聞くことである。私の往生浄土の仕事は阿弥陀仏がすでに私に代わって仕上げてくださいましたということ。助からぬ私を助ける仕事は仕上げられているというその姿が阿弥陀仏であり、南無阿弥陀仏である。その阿弥陀仏のお手元を見ずに、自分の方ばかりを見ようとするのは、自分はまだどうかなれると思う橋慢心からである。阿弥陀仏の本願成就されたことをさしおいて、いつまでも自分の心を何と

かしたいと、自分を何とかすること  
に目がいつているから、いつまでも  
疑いが晴れないのである。

聖人が「かの因を建立せることを了知することあたわざるがゆえに、報土に入るることなきなり」（化身土巻）と申される通りである。浄土の因はすでに阿弥陀仏が建立してくださった。そのことを了知できないのである。蓮如上人もここを「このゆえに南無阿弥陀仏の六字のすがたは、われらが極樂に往生すべきすがたをあらわせるなりと、いよいよしられたるものなり」（お文五帖目十三）と仰せられている。

②如来の御勅命が我が身一人の為と聞こえぬゆえ疑いがはれぬ。

南無阿弥陀仏の念佛の声は「助からぬ汝を助ける」の勅命（仰せ）であるが、それを他人ごとのように聞いている。「十方衆生若く不生者不取正覚」（十方の衆生、もし生まれずば、正覚を取らじ）と聞くからは大衆みんなに向かって仰せくださるようなに漠然と思うが、そうではない。お念仏が口から出てくださることは、私目当ての、私を救う、私のための仏様が出てくださり、「我汝を引き受ける」と喚んでくださっているのである。それをザルでメダカの群れを救うようにおおざっぱに弥陀の本願を聞いているゆえ、疑いが晴れないのである。

弥陀のご修行も一人一人に当ててのご修行と聞く。弥陀は「衆生を一子のごとく憐念」（浄土和讃）したもう。聖人は「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずればひとえに親鸞一人がためなりけり」といわれ、池山栄吉先生は「久遠この方子ゆえの廻向 私一人を片おもい」と歌わ

れている。

弥陀の本願を「この私のため、この私目当て」と我が身の上に直に受けとめるのである。弥陀の本願を我がためとまっすぐに引き当てて聞かぬゆえ、いつまでも疑いが晴れないとの思し召しである。

③御授けの信心と云うことがわからぬゆえ疑いがはれぬ。

信心は全くの恵みであって、人間の側で起こすことも出来ねば、作ることも出来ない。

それが分からないから、聞けば信じられる、内観を深めれば信じられる、読んて考えれば信じられるなどと、自分の行いによって信心に手が届くように思う。

これみな「功德を得んと」（唯信鈔文意）のはからいである。すなわち自我はいつでも「これをして良きなものかを得よう」とするのである。

聞法や内観や読書や思索がいけないというのではない。ほっておいて信心はただけず、聞法しなくては信心は開かれないのであるが、自我によって信心をつかもうとするはからい（橋慢心）が信心にそむかしてしまっているのである。

そういう自我のはからいによって、信心は得られない。信心は自我を超えている。信心は自我を照らし、自我固執を破り、人を真に生かそうとする。だから自我の手中に信心は落ちないのである。

信心をつかもうとするのは天上の月を手でつかもうとするようなもの。信心の月は自我の手でつかまはれない。月は空において仰ぐばかりでよい。「ああきれいやなあ」と。本願の月を仰ぐ私の眼に月の影は映っている。仰ぐままが（お授けの信心）である。

④たのんで助かると思うから疑いがはれぬ。

弥陀の仰せは「助けるでタノメ」の仰せである。そう聞けば「それじゃ、たのめば助けてくださる」と思うのであるが、それが自力橋慢心で、これが疑っている姿である。「たのんだら助けてくださる」も「信じたら助けてくださる」も「称えたら助けてくださる」も「己の悪の深さを知ったら助けてくださる」も、私の側から助かりにかかっているのである。（他力）ということが分からないのである。一蓮院師が「どうなるでもこうなるでもなかった。如来様が助けると仰せくださるばかりであった」と言われる通りである。

いよいよ私の方にタノム力も全くないと知らされて、ただ單純に弥陀をたのむばかりである。 （了）